

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02941

研究課題名(和文)クリエイティブな分野における異文化間コミュニケーション：英語ニーズと戦略の研究

研究課題名(英文) Art Meets Words: A Linguistic and Ethnographic Study on Japanese Art Practices in the Context of Globalisation

研究代表者

渡辺 紀子 (Watanabe, Noriko)

立命館大学・国際関係学部・非常勤講師

研究者番号：40466909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、エスノグラフィーと言語分析の組み合わせにより、グローバル化の進展を背景に美術、ダンス、音楽の分野の日本の芸術家達が経験している「ことば」の必要性・重要性の高まりを検討した。その際、日本の助成機関や芸術家達による欧米で使用される新しいジャンル・テキストの導入というグローバルな言語のフローを確認し、使用ニーズの高いジャンルを特定し、日本語と英語で使用されるジャンルの連続性・非連続性と日本の芸術家による使用例を検討した。さらに、ことばの使用の高まりに伴うローカルな芸術実践の変容を考察し、ローカルな芸術言説・実践や既存のジャンルの影響により新たな課題やジレンマが生じていることも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

芸術は「ことばで表せないものを表現する」とみられる分野であるため、言語コミュニケーション面に関する研究は国際的にみても遅れている。一方、特定集団で使用される言語に焦点を当てた研究は自然科学諸分野を対象にしたコーパス分析による量的研究に偏る。本研究は「わざ」が重視され、「ことば」の使用が軽視されてきた日本の芸術分野におけることばの使用の必要性・重要性の高まりに光を当てた初めての研究である。「ジャンル」の観点から言語のグローバルなフローとそれにともなうローカルな芸術実践の変容や課題も捉えた。本研究で得られた知見をもとにグローバル化の進展＝英語の普及という認識および現行の教育の方向性の再考を促す。

研究成果の概要(英文)：Combining ethnographic research with linguistic analysis, we have examined the increasing significance of 'words' experienced by Japanese visual and performing artists. In doing so, we identified genre texts such as portfolio websites and artist statements which need to be presented in Japanese and English to reach both local and global audiences. We examined how these genre texts are actually adapted by Japanese artists. Furthermore, we identified the global linguistic flows by which these new genre texts are being introduced from the West to Japan by granting organisations and the artists themselves. Using these new global genres, Japanese artists are increasingly required to use 'words', which is shifting their art practices. This new practice also poses challenges and dilemmas for them due to the influence of local art discourses and practices as well as existing genre texts.

研究分野：人文学

キーワード：日本 芸術実践 ジャンル グローバル化 ローカル化 デジタル化 助成制度 標準化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、文部科学省による「グローバル化に対応する」必要性の認識のもと次々と教育改革が推進されている。大学では 2008 年に文部科学省の中央教育審議会からの答申で示された「専門分野を学ぶために必要な語学力の習得」という指針を受けて ESP (English for Specific Purposes) や CLIL (Content Language Integrated Learning) など学生の専攻に合わせた英語教育が導入されている (大学英語教育学会監修 2010, 渡部・池田・和泉 2012)。「グローバル人材」育成のために英語による授業 (EMI: English as a medium of instruction) や学位プログラムも一部で導入されている。だが、「グローバル化に対応する」というスローガンの下、上からの視点から英語教育や英語による教育が推進される一方で、グローバル化する日本でどの分野や職種でどのような言語ニーズが実際に生じているのか十分に把握されているとは言い難い。

(2) 特定集団で使用される言語については、LSP (Language for Specific Purposes) 研究、特に ESP (English for Specific Purposes) 研究の蓄積があるものの (Dudley-Evans and St John 1998)、理工系分野とコーパス分析等の量的研究に偏り、エスノグラフィーなど質的研究が遅れていることが指摘されている (Hocking, 2003; Bhatia, 2008; Paltridge & Starfield, 2014, Dressen-Hammouda, 2014)。さらに、「ジャンル」、即ちある特定の集団のメンバーが共通理解する特徴を有する伝達事象の概念、の研究で国際的に知られる Bhatia (1993) は、後に職業上専門的な言説が単なるテキストやジャンルとして捉えられてきたことを批判し、より広い制度、職業、組織、分野の文化に位置づけられる専門的な実践として理解すべきであると論じている (Bhatia, 2008)。芸術分野の先行研究は作品や作家に焦点を当てた研究が多い中、諸外国や日本の文化政策の展開に関する研究のほか、国境を越えて活動する日本やアジア系の芸術家やデザイナーの国際戦略や国際的な受容などに関する研究もされている (小林 2018a, 2018b, 2018c; Kondo, 1997; Yoshihara, 2007; Fujita, 2011)。では、これらの芸術家は、どの言語を用いて国境を越えて活動しているのだろうか？英語ニーズは高まっているのだろうか？それとも「わざ」と感性の世界ではことばは不要なのだろうか？ことばが必要なら、どのような場面でどのジャンルを使用するニーズが高いのだろうか？日本の芸術家達に対してグローバル化はどのように現れているのか？

## 2. 研究の目的

本研究プロジェクトは、芸術分野 (美術、ダンス、音楽) における国境を越えた活動の拡大に着目し、そこでの英語「ニーズ」と戦略を明らかにすることを目的とした。具体的には、①国内外に拠点を置く日本の芸術家の分類と「ニーズ」のマッピング、②特有の言語ニーズの把握、③最低限必要とされる英語の選定、④英語教育の方向性の提示を行う、とした。だが、国内で開始したインタビュー調査に基づき、英語ニーズに限らず「ことば」そのものの必要性・重要性の高まりについて検討することにした。海外の学会参加により、芸術家が使用する英語のジャンルのいくつかは言語分析が進行中・予定であることも知った。そこで、日本の芸術家の経験に即して以下のように問いを立て直し、当初に予定していたニーズ分析を越えてより学際的な研究として進めることにした。①日本の芸術家は、いつ、どのようにして「ことば」の必要性・重要性に気づいたのか、それはどのようなコンテキストに位置づけられるのか、②日本の芸術家の間でニーズの高いジャンルは何か、どのような目的で、誰を対象にどの言語を用いてどのように「適用」しているのか、③「ことば」の使用により芸術実践はどのように変容し、どのような可能性や課題が生じているのか、④本研究の知見に基づき、「グローバル化に対応する」方向で進められている教育改革にどのような示唆を与えることができるのか。

注：本研究プロジェクトの日本語タイトルは申請時のものであるが、研究が発展したため合わなくなった。英語タイトルは研究成果に合わせた。申請時には英語の‘creative disciplines’に合わせて「クリエイティブな分野」「クリエイティブな人々」という表現を用いたが、日本語での意味が限定されるため「芸術分野」「芸術家」を用いることにした。同様の理由により日本語での「アーティスト」の使用も避けた。本研究が対象とする芸術分野は、美術、ダンス、音楽とし、文学など主にことばで表現する分野は対象外とする一方、グラフィックデザイナーらも含めた。本研究における「芸術家」は自ら創作した作品や既存の作品を一般対象に発表している人々とし、作品の制作や発表が主な収入源か否かは不問とした。

## 3. 研究の方法

本研究は 3 名の研究チームで役割分担しながら進めた。野口 (研究分担者) が主に先行研究調査を、渡辺 (研究代表者) が半構造インタビューと参与観察に基づく質的研究 (エスノグラフィー) を、三崎 (研究協力者) がジャンル・テキストの言語データ分析をそれぞれ担当した。これらの質的研究方法と量的研究方法による研究を個別に進め、定期的に研究成果を報告し合い、両方の研究成果を統合させてより包括的な理解を目指すことにした。

## 4. 研究成果

### (1) 口頭発表

国内はおろか海外でも研究の進んでいない研究領域であるため、毎年、国内外の様々な場で研究成果を発表した (計 15 件)。発表を重ねる中で分析の枠組みを見直し、分析も深まっていつ

た。国内よりも海外の学会での反応の方がよく、査読者より高く評価され、司会者より国際ジャーナルへの投稿を薦められるなどした。また、極少数ではあるが国内外で関連テーマの研究・教育に取り組んでいる人々とも出会い、ネットワークを築けた。より多くの人々に興味をもってもらうために集合的に発信する必要性についても議論した。国内では芸術家や関連職種の人々へのインタビュー・発表・意見交換から芸術家らの間での関心の高さを確認することができた。最終年度にはこの研究領域のパイオニアの研究者である Darryl Hocking 氏を招いた国際シンポジウムを開き、グローバルな潮流とローカルな言説実践をつなげた国際的な共同研究として発展させる視座を得た。

#### (2) 学術論文・書籍他の刊行

前述したように、問いを立て直して予想以上に研究が発展したため、現時点では未刊行だが、言語分析とエスノグラフィーを統合させた研究成果の概要をまとめた共著論文（日本語）を手直しして、今年度中に国内の学術誌に投稿予定である。言語分析とエスノグラフィーに基づく研究をそれぞれの担当者が単著論文（英語）としてまとめ、国際学術誌に投稿予定である。Darryl Hocking 氏が構想している英語論文集の出版プロジェクトにも招待されている。さらに、研究者コミュニティだけでなく、芸術家を中心により広い社会に向けて発信するため、インタビュー調査をもとに一般向けの書籍の刊行も検討している。インタビュー協力者とは名前等個人が特定される情報は出さないという同意書を交わしたが、許可を得て一部の芸術家の顔が見えるようにしてまとめたい。国内外で芸術家が使用する英語のジャンル・テキストの分析をしている研究者らと共同して英語ハンドブックの出版企画も進めたい。

#### (3) 芸術家による「ことば」の使用とコンテキストの変化

先行研究の文献調査により、芸術分野の言語コミュニケーション面に関する研究は国際的にも遅れていることを再確認することができた。一方、2000年代よりヨーロッパを中心に発展しつつある linguistic ethnography (Copland & Creese, 2015; Snell, et al., 2015) にもつながり、先述した Bhatia (2008) の指摘にも通底するアプローチであることを確認した。さらに、欧米の芸術家を中心に20世紀以降使用するようになった「ジャンル」の一部については哲学、文学、歴史学、文化人類学、応用言語学など様々な分野の研究者により取り上げられていることもわかった (Hocking, 2003, 2018; Yanoshevsky, 2009; Krauth and Nash, 2019; Williams, 2019)。これらの先行研究から他分野から取り入れられたジャンルのフローとモダニズムの興隆、芸術教育の制度化、インターネットの普及といったコンテキストを確認することができた。

日本の事例については、国内外を拠点とする40人の日本の芸術家ら（美術家、音楽家、ダンサー・振付家、助成機関プログラムオフィサー、通訳・翻訳者）とのインタビューと参与観察（音楽家対象の企画セミナー、振付家を目指す人々対象のワークショップ、国際舞台芸術会議、作品の発表の場等）と資料収集（パンフレット、図録、チラシなど）を行い、インターネットの普及、脱工業化の進展、助成制度の導入といったコンテキストの変化とことばの必要性・重要性の高まりの関係を「グローバルな言語のフロー」 (Appadurai, 1996; Alim, et al. 2001) の観点から検討した。その際、Williams (1981) の文化生産制度に関する歴史的考察やバルト (1979) の「作者の死」論といった視座も用いて多角的に考察した。

インタビューに基づき、日本の芸術家のキャリアステージと活動範囲とことばの使用ニーズの相関関係を検討した。多くはプロフェッショナルな芸術家として活動を開始した時に「他者」に通じる「ことば」の必要性に気づいたと語るが、その際に新しいジャンルとも出会っている。一方、専門用語等は「(標準化された) メソッドが無い」と指摘される日本のコンテンポラリーダンスを除いては、実践コミュニティ参加過程で特に困難を伴わずに習得し、使用されていることが伺えた。さらに、歌劇場など団体所属の芸術家とフリーランスやカンパニー主宰者の芸術家、演じ手と創り手の間、職位の異なる団体所属の演じ手の間、伝統的な芸術分野領域（油絵、バレエ、クラシック音楽など）と現代的な表現領域（現代美術、コンテンポラリーダンス、現代音楽など）の芸術家の間、国内のみで活動する芸術家と海外拠点（非英語圏を含む欧米諸国）もしくは国内拠点を拠点としつつ国際的に活動する芸術家の間でのニーズの違いを示した。芸術家による言語使用が助成金獲得等の評価に影響を及ぼしていることは確認できたが、言説分析に基づく芸術家自身の戦略と外部からの評価、それらのジェンダー間の差異について検討する必要性も認識した。

#### (4) 日本語と英語でニーズの高いジャンルの特定とその言語特徴

インタビューと参与観察により、美術、ダンス、音楽の分野で共通してニーズの高いジャンルを特定し、日本語と英語で使われるジャンルの連続性と非連続性に注目しつつ、ニーズの高いジャンルを特定し、分類した。言語分析により、公開されている書きことばのジャンル（ポートフォリオサイト、プロフィール文、アーティスト・ステートメント）の言語特徴などを明らかにした。さらに、日本の芸術家によるものと英語圏の芸術家による書きことばのジャンルを比較しつつ、グローバルなジャンルのローカル化 (Alim, et al. 2001; Yanoshevsky, 2008) の傾向と特徴も検討した。さらにインタビューと言語分析により、英語帝国主義論 (Phillipson, 1992)

や日本語衰退論(水村 2008)で示された単純な構図を超えたグローバルな言語のフローを捉えることができた。この言語のフローから日本語で使用されるジャンルが今後増えていくことが予想される。

#### (5) 芸術家たちの国境の越え方と共通言語

インタビューより、芸術家達の国境の越え方と国境を越えて活動する芸術家達にとっての国際共通語についても確認した。科学者達とは異なり、芸術家達にとっての共通語は必ずしも英語ではないことがわかった。例えば、ドイツ語圏の歌劇場に所属する多国籍の音楽家たちの間での共通言語はドイツ語であった。一方、インタビューおよび言語分析に基づき、日本の芸術家の間での英語使用ニーズの高まりも確認した。国内を拠点とする芸術家による英語を使用する機会や使用ジャンルは留学経験者を除くと限定的であったが、ポートフォリオサイトを英語で発信している、しようとする芸術家は多く、インターネットの普及の影響が確認できた。非英語圏でも英語を使って活動する・コンクールなどに応募する美術家、ダンサー、振付家、音楽家もいた。英語使用により、海外の潤沢な助成金やアーティスト・イン・レジデンスといったチャンスを得る可能性は高まり、海外(特に欧米の芸術の「中心」)での評価は国内での評価にもつながるなど、芸術家としてのキャリア上のメリットが認められた。

#### (6) グローバルな言語のフローとローカルな芸術言説・実践

申請時に想定していた「異文化間コミュニケーションのギャップ」ではなく、グローバルな言説・実践と「わざ」と感性を重視するローカルな芸術言説・実践との間のギャップや軋轢を示すことができた。塚本(2008)がロゴスの「テクネー」と呼ばれるヨーロッパの伝統と言語から離れた日本の「わざ」の語り方の伝統を対比させたが、インタビュー協力者たちも「ことばに言い表せないもの」を表現することに価値を置く傾向がみられ、ことばの使用にジレンマを感じている芸術家もいた。一方、ことばの使用に伴う見えない芸術実践の変容もいくつか捉えた。インタビュー協力者達にはポジティブな変化として語られたが、芸術実践の標準化とも呼べる変化をより多角的に捉える必要があると認識している。芸術家による自らの作品の言語化が、作品の受容プロセスにどのように影響を与えているのか、そしてことばの使い手である批評家やキュレーターらとの関係はどのように変化しているのか、海外での受容・評価にどのような変化を及ぼしているのかといった新たな問いも生まれ、今後の研究課題とした。

#### (7) グローバル化する日本における言語ニーズの認識および教育の方向性の再考

本研究で得られた知見をもとに、グローバル化＝英語の普及を越えた認識を越えて、教育の方向性の再考を促したい。国内を拠点にする日本の芸術家の間でも英語使用ニーズの高まりが確認されたが、欧米から取り入れられた新しいジャンルの使用とそれに伴うことばの必要性・重要性の高まりの方がより広く経験されていることが明らかになった。同様に、他分野・職種についてもグローバル化のプロセスを捉え直す必要がある。グローバル化が進展する中で日本の芸術家たちの言語・コミュニケーション能力不足が指摘できるが、芸術実践の違いから言語面だけに焦点を当てたトレーニングだけではグローバル化に対応するのは困難といえる。インタビュー協力者が海外の大学で経験したように、歴史(美術史など)や理論や社会的文脈に自らの作品を位置づけて言語化するトレーニングとそのための新しい「ジャンル」の導入が必要といえるが、西洋中心的な歴史や理論を無批判に受容・応用できないだろう。そして多様な表現やアプローチを廃して、ジャンルおよび芸術実践の標準化を無批判に推進してよいものか疑問も残る。芸術家自身が新しいジャンルを「翻訳」し、進化・発展させていく必要があるだろう。

#### 参考文献

Alim, H. S., Ibrahim, and Pennycook, Al. (Eds., 2008). *Global Linguistic Flows: Hip Hop Cultures, Youth Identities, and the Politics of Language*. Oxon, UK: Routledge.

Appadurai, A. (1996). *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Bhatia, V. K. (1993). *Analysing Genres: Language Use in Professional Settings*. London: Longman.

Bhatia, V. K. (2008) Towards a critical genre analysis. In V. Bhatia, J. Flowerdew, and R. Jones (eds.), *Advances in Discourse Studies*. 166–77. London: Routledge.

Blommaert, J. (2003). *Commentary: A sociolinguistics of globalization*. *Journal of Sociolinguistics* 714: 607-623.

Copland, F. & Creese, A. (2015). *Linguistic Ethnography: Collecting, Analyzing and Presenting Data*, London, UK: Sage.

- Dressen-Hammouda, D. (2013). Ethnographic approaches to ESP research. In B. Paltridge & S. Starfield (Eds), *The Handbook of English for Specific Purposes* (pp. 501-517). Chichester, UK: Wiley.
- Dudley-Evans, T. & St. John, M. J. (1998). *Developments in English for Specific Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fujita, Y. (2011). Fabricating Japaneseness? The identity politics of young designers and artists in global cities. *International Journal of Japanese Sociology* 20(1): 43-58.
- Hocking, D. (2018). *Communicating Creativity: The Discursive Facilitation of Creative Activity in Arts*. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- Hocking, D. (2003). The genre of the postgraduate exegesis in art and design: An ethnographic examination. *Hong Kong Journal of Applied Linguistics* 8(2): 54-77.
- Hyon, S. (2018). *Introducing Genre and English for Specific Purposes*. Abingdon, UK: Routledge.
- Kondo, D. K. (1997) *Crafting Selves: Power, Gender and Discourses of Identity in a Japanese Workplace*. Chicago, US: The University of Chicago Press.
- Krauth, N. and P. Nash. (2019). Creative work as scholarly work, *New Writing: The International Journal for the Practice and Theory of Creative Writing*, 16(3): 281-302.
- Paltridge, B. & Starfield, S. (2013). *The Handbook of English for Specific Purposes*. Chichester, UK: Wiley.
- Phillipson, R. (1992). *Linguistic Imperialism*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Snell, J., Shaw, S. and F. Copland. (Eds.). (2015). *Linguistic Ethnography: Interdisciplinary Explorations*. Palgrave advances in language and linguistics. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- Solin, A. (2008). The teaching portfolio as a hybrid genre: Local and global influences. In Garant, M., I. Helin & H. Yli-Jokipii (Eds.), *Kieli ja Globalisaatio: Language and Globalization*. AFinLA yearbook, 66, 359-380.
- Williams, P. (2019). A writer's manifesto: articulating ways of learning to write well, *New Writing: The International Journal for the Practice and Theory of Creative Writing*, 17(1): 71-79.
- Williams, R. (1981). *The Sociology of Culture*. New York, NY: Schocken.
- Yanoshevsky, G. (2009). Three decades of writing on manifesto: The making of a genre, *Poetics Today* 30(2), 257-286.
- Yoshihara, M. 2007. *Musicians from a Different Shore: Asians and Asian Americans in Classical Music*. Philadelphia: Temple University Press.
- 小林真理 (編) (2018a) 『文化政策の現在 1 : 文化政策の思想』 東京大学出版会
- 小林真理 (編) (2018b) 『文化政策の現在 2 : 拡張する文化政策』 東京大学出版会
- 小林真理 (編) (2018c) 『文化政策の現在 3 : 文化政策の展望』 東京大学出版会
- 大学英語教育学会 (監修) , 寺内一, 野口ジュディ, 笹島 茂, 山内ひさ子 (編) (2010) 『21 世紀の ESP : 新しい ESP 理論の構築と実践』 (英語教育学大系 4) 大修館書店
- 塚本明子 (2008) 『動く知フロネーシス : 経験にひらかれた実践知』 ゆみる出版
- バルト, ロラン (1979) 『物語の構造分析』 花輪光訳, みすず書房
- 水村美苗 (2008) 『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』 筑摩書房
- 渡部良典, 池田真, 和泉伸一 (2012) 『CLIL(クリル)内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第2巻 実践と応用』, SUP 上智大学出版

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 渡辺紀子、三崎敦子、野口ジュディー、高畑早苗、岩淵貞太、関かおり
2. 発表標題 Can Art Speak for Itself? アートにことばは不要か?
3. 学会等名 Cultural Typhoon 2019 (カルチュラル・スタディーズ学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Watanabe
2. 発表標題 When Artists Meet Words: Changing Creative Practices in Japan
3. 学会等名 Inter-Asia Cultural Studies Society Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Watanabe, Atsuko Misaki, Judy Noguchi
2. 発表標題 Words, Words, Words: Language Needs and Genres for Artists in Japan and Beyond
3. 学会等名 CUE ESP Symposium 2019 (JALT) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Atsuko Misaki
2. 発表標題 Verbalizing Art Through Self-Promotional Genres by Japanese Artists
3. 学会等名 ALAPP 2019 (International and Interdisciplinary Conference on Applied Linguistics and Professional Practice) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺紀子、野口ジュディー
2. 発表標題 (コロッキアム) グローバル化する日本における言語ニーズを再考する：芸術家たちの事例から (Rethinking Language Needs in Globalising Japan: Cases of Visual and Performing Artists)
3. 学会等名 JACET関西支部大会2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺紀子、野口ジュディー、寄田茜、菊池美咲、松浦悠子
2. 発表標題 Can Art Speak for Itself? アートにことばは不要か?
3. 学会等名 金沢美術工芸大学 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Watanabe
2. 発表標題 Becoming Articulate: The Shift in Art Practices of Japanese Artists
3. 学会等名 International Symposium 'Art Meets Words: Linking Global Trends with Local Practices (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Atsuko Misaki and Judy Noguchi
2. 発表標題 Adapting Global Genres: Self-articulation Practices of Japanese Artists
3. 学会等名 International Symposium 'Art Meets Words: Linking Global Trends with Local Practices (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野口ジュディー、三崎敦子、渡辺紀子
2. 発表標題 芸術家のコミュニティの現況：日本の芸術家たちの言語実践から (Artist Communities Today: A View from the Language Practices of Japanese Artists)
3. 学会等名 JACET関西ESP研究会 特別セッション「ことばの境界を越えて：コミュニティと言語実践を再検討する」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺紀子、三崎敦子
2. 発表標題 In Search of Language Needs of Artists and Designers in Japan
3. 学会等名 Applied Linguistics and Professional Practice (ALAPP) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺紀子
2. 発表標題 Experiencing the Process of Globalisation: Changes in Language and Creative Practices in Japan
3. 学会等名 Linguistic Ethnography Forum (LEF), 'Explorations in Ethnography, Language and Communication (EELC)' (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三崎敦子、野口ジュディー
2. 発表標題 Use of self-promotional genres by Japanese artists
3. 学会等名 RELC International Conference and Asia-Pacific LSP & Professional Communication Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺紀子、三崎敦子、野口ジュディー
2. 発表標題 Can Art Speak for Itself?: アートに言葉は必要か?
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Noriko Watanabe and Atsuko Misaki
2. 発表標題 Context Matters: Language needs of artists and designers in Japan
3. 学会等名 CAES International Conference: Faces of English 2 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡辺紀子、三崎敦子、野口ジュディー
2. 発表標題 アート・デザイン分野における英語: アーティストのポートフォリオにみられる言語的特徴を中心に
3. 学会等名 JACET関西支部秋季大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	野口 ジュディー津多江  (Noguchi Judy Tsutae)  (30351787)	神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・名誉 教授    (34509)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	三崎 敦子  (Misaki Atsuko)	関西大学・環境都市工学部・非常勤講師	